

ゲームとしての言語

— ソシユールとウィトゲンシュタインについて —

斎藤 伸 治

1. はじめに

現代言語学の祖とされるソシユールは、古代ギリシア以来ずっと支配的だった言語に対する1つの見方・問題意識を、無意味なもの、言語の本質を捉え損なうものとして退けたということが言われる（丸山（1981）、Harris and Taylor（1989）などを参照）。このソシユール以前の西洋の言語に対する見方というのは、ソシユールの言葉を用いれば、「名称目録的言語観」（nomenclaturism）というものであり、平たく言えば「言葉とは本質的に事物を名指すものであり、その事物は言葉とは独立に存在している」という言語観であった。西洋における最初の本格的な言語論であるプラトンの『クラテュロス』篇（伝統的な副題は「名前の正しさについて」）は、この言葉と事物との間の関係が自然的なものかあるいは人間社会の側の慣習にすぎないものかについて論じたものであり、この書以来ずっと、言語とはまず基本的に外界のものを名指すものであるという言語観が、西洋の思想界を支配してきたということになる。

ソシユールは、それに対して、言語は外的世界の事物や意味を名指すものではなく、逆に言語の方がそういった事物や意味を生み出していると主張したわけだが、20世紀前半の西洋言語論の1つの大きなテーマは、このように言語とはそれぞれ独自の仕方で世界を分節化するものであり、我々の認識や思考のあり方は言語に依存するところが大きいという主張をめぐるものだったとみていいように思われる。というのも、同じような主張が、異なった場

所で、おそらくはソシュールとは全く独立的になされているということが言えるからである。1つはアメリカの言語学者サピア（とその弟子のウォーフ）によるものである。アメリカの科学的言語研究は人類学の一部門として始まるわけであるが、サピアは、アメリカ・インディアン語を研究する過程において、ほぼ似たような結論に達していた。もう1つは、学問分野がソシュールやサピアとは異なるが、後期ウイトゲンシュタインの言語哲学である。彼らは皆、言語とは独立に客観的で秩序だった世界があるということを否定し、我々の思考・認識のあり方は言語に大きく依存していると考え、名称目録的な言語観を退ける。この言語以前の客観的な世界の否定、思考・認識の言語依存性の思想ということで、一般的に最も知られているものはサピア、そしてウォーフによる主張だろう。サピアは例えば、"The Status of Linguistics as a Science" (1929) において、そしてウォーフは"Science and Linguistics" (1940) という一般対象者向けの論文においてもっと明快に、以下のように述べている（訳文はどちらも池上嘉彦氏による訳）。

人間は自分たちの社会にとって表現の手段となっているある特定の言語に多く支配されている。基本的に言語を使うことなく現実に適応することが可能であると考えたり、言語は伝達とか反省の特定の問題を解くための偶然の手段にすぎないと思ったりするのは、全くの幻想である。事実は「現実の世界」というものは、多くの程度にまで、その集団の言語習慣の上に無意識的に形づくられているのである。(Sapir (1929))

われわれは、生まれつき身につけた言語の規定する線にそって自然を分割する。われわれが現実世界から分離してくる範疇とか型が見つかるのは、それらが、観察者にすぐ面して存在しているからというのではない。そうではなくて、この世界というものは、さまざまな印象の変転きわまりない流れとして提示されており、それをわれわれの心--つまり、われわれの心の中にある言語体系--というのと大体同じもの--が体系づけなくてはならないということなのである。(Whorf (1940))

以上にみられるような主張は、彼らの名前を冠して、「サビア＝ウォーフの仮説」としてよく知られているものである。しかし、本稿では特に、ソーシャルとウィトゲンシュタインの方に焦点をあてて、彼らの言語と思考・認識の関わりの問題について考察してみたい。彼らはそれぞれ、言語学と哲学という異なった分野において、20世紀の言語論に非常に大きな影響力をもった思想家であるが、学問分野が異なっていたということもあって、その共通性を取り上げた本格的な研究は、これまでのところあまりなかったように思われる。¹⁾しかし、彼らの間には知的な影響関係は全く存在していなかったとされるにもかかわらず、両者とも意識的にそれまで支配的だった名称目録言語観を否定し、それに代わるものとして、チェスなどのゲームとの類比に基づいた言語観を提出するなど、彼らの言語思想には、根本的な点において興味深い一致点が確認されるのである。本稿ではこの両者について、特に言語と思考の関係という問題に焦点をあてて、その類似するところ、そして相違するところについてまとめておきたいと思う。

2. チェスとソーシャル、ウィトゲンシュタイン

ソーシャルは、『一般言語学講義』のある箇所において、大気と水の間の接触という非常に印象的な比喩的イメージのなかで、言語が、思考の面でも音の面でも、無限定で不明確な実体を区画するところに成立するものであるということを主張している（『一般言語学講義』158）。²⁾大気と水の間の接触面にできる波は、大気のかたまりと水のかたまりとの間で気圧が変化することによってできた形である。大気と水との間には、それらを媒介するような層は全く存在しないが、その接触面は分割化されている。接触面におけるその形は、同時に接触している2つのかたまりの形であって、その入り込み具合は正確に一致する。それらが大気の波ではなく、水の波と見えるのは、単に水の方は見えるのに、大気は見えないという事実によるにすぎない。こ

の比喩的イメージのなかでソシュールが述べようとしているのは、音と思考、あるいは表現と内容の同時発生、不可分性ということであり、音と思考との間にあってそれらを媒介する、何か不可思議な第3の層なるものは存在しないということである。水の波の面しか見えないように、言語の場合も、音の方しか知覚できず、その思考の方は知覚できないわけだが、音と思考は別々の言語的存在というわけではない。さらにソシュールは、そのすぐ後で、この音と思考との分離不可能性をもっと具体的な比喩で説明するために、1枚の紙の表と裏の例が引き合いに出して「紙の表にはさみを入れれば、同時に裏も切ってしまうことになる。それと全く同じように言語の場合でも、音を思考から切り離すことも、思考を音から切り離すこともできない。」（『一般言語学講義』158）と述べている。言語記号を構成する音型と概念の間の結びつきは、あらかじめ独立に存在する2つを結びつけている、というようなものではないのである。

それ以前の西洋の言語に対する見方では、言葉というのは、外的世界の事物や我々の心の中の観念を名指すのがその基本的な働きであると考えられていた。³⁾ プラトンの『クラテュロス』篇がそういった前提に立った西洋最古の言語論であり、そういった前提に立った上で、言葉とそれが外的世界において指し示す事物との間にどんな関係が成り立っているのか（自然的な関係か、単に社会的な約束事によるものにすぎないのか）という問題をめぐって、議論が展開されていた。また、同様に西洋の言語論の伝統において大きな影響力をもっていたとされるアリストテレスの『命題論』においても、その冒頭部分で、言葉は「靈魂の印象（つまり観念）の印」であるとされている。

ソシュールは、このように言語というものを、本質的に言語外の何かを名指すものとみる見方では、言語の本質を見誤ってしまうと考えたわけである。それでは、ソシュールはこのような名称目録的な言語観に代えて、どのような言語の見方を採ったのだろうか。簡単に言えば、ソシュールは、この欧米言語論の伝統的な見方であった名称目録的な言語観を退け、その代わりとして、ゲーム的な言語観を採ったと考えることができると思われる。特にチェスは、言語の働きを説明する際のソシュールのお気に入りの比喩であった。例えば、

チェスの駒の働きを説明するのに、チェスゲームの外部のものとの関係に目を向けようとは思わない。ゲームというのは、根本的な意味において、自己完結的であり、チェスの駒にとっての外的な事柄、素材や形態などは無関係だからである。

チェスの駒のナイトについて考えてみよう。これは、それだけでゲームの要素となるだろうか。絶対にそうはならない。なぜならば、盤の目や他のゲームの状況から切り離された、その純粹の物質性だけでは、それは、ゲームを行なっている者に対して、何ものも表さないからである。それが現実の具体的な要素になるのは、ゲームにおけるその価値を担い、それと一体になった場合だけなのである。今、ゲームの途中で、この駒が失われたか、破損したと仮定してみよう。他の駒でそれに替えることができるだろうか。もちろん、できよう。他のナイトだけでなく、全く異なった形状のものであっても、それと同じ価値をもたせさえすれば、ナイトであるとみなすことができるのだ。(『一般言語学講義』154-5)

言語の場合もこれと同じであるというのが、ソシュールの主張である。つまり言語は、言語外の事物や観念のいかなる像でもないということ、外的世界に何ら根拠をもたないものということになる。ソシュールの考えでは、名称目録の言語観の根本的な誤りは、チェスの駒の意義と機能を明らかにするためには、チェスゲームの外部に目を向けなければならないとすることに似ている。そういったことは、不必要というだけではなく、チェスとは何かという問題を完全に理解しそこなうことになるだろう。同様に、言語的要素の意義と機能を明らかにするために言語の外部にあるものに目を向けようとすることは、言語とは何かという問題を完全に理解しそこなうことになるのである。ソシュールが言語学者として科学的な言語研究の土台を築くために行なった言語研究のあり方の変更は、このチェスをはじめとするゲーム的な言語観への転換という観点からみることで、はじめて正しく位置づけられることが多いように思われる(詳しい議論については、Harris (1988) を参照)。

この名称目録的な言語観からチェスなどのゲーム的な言語観への転換というのは、ソシュールよりやや遅れて現れ、属する学問分野は異なるものの、やはり20世紀の言語論の流れに革命的な影響を与えることになるウイトゲンシュタインと正に共通するところのものである。そしてさらに、Harris (1988:1-2) でも指摘されているように、彼ら自身の内部において、その前期から後期の言語観において同様の転換が起こっているということでも共通性がみられるのである。実際のところ、両者の研究の発展のあり方には、非常に似通ったものがある。まず、両者とも初期の傑出した著作で名をあげ、それらは当時の学界に大きな反響を呼んでいる。ソシュールは、わずか21歳の時に『インド=ヨーロッパ諸語における母音の原初体系に関する覚え書』を発表している。一方、ウイトゲンシュタインの『論理哲学論考』は、彼が32歳の時に『自然哲学年報』に掲載されたものである。2人ともその決定的な名声が、死後に出版された晩年の著作に依っているというのも、よく似ていると言える。ソシュールの『一般言語学講義』も、ウイトゲンシュタインの『哲学探究』も、彼らの死後に弟子たちの手によって編集され、刊行されたものだった。

ソシュールの場合、はじめは比較言語学者として出発している。比較言語学者たちは、音と意味とは分離したものであり、2つの観点のいずれからでも独立的に考察することができるものと考えていた。例えば、スウィートは、1900年に次のように書いている。

我々の思想を表すどの文や語にも、それらを構成する音声によって、それ自身の明確な一定の形式が与えられているし、また程度の差こそあれ明確な意味も備わっている。言語研究においてなすべき第一のことは、この形式と意味の二重性をはっきりと認識することである。これらは各々、言語の形式的側面と論理的（あるいは心理的）側面を構成している。・・・言語の形式的側面の研究は、音声学—言語音の科学—に基礎を置き、言語の論理的側面の研究は、心理学—心の科学—に基礎を置いている。

(Sweet (1900))

このように、19世紀のヨーロッパの比較言語学者たちは、無意識的にせよ言語名称目録的言語観の観点に立って研究を行っていたわけである。そして『一般言語学講義』において名称目録的言語観が徹底的に批判の対象とされる際には、その批判の鋒先は当然、初期の彼自身のことも含まれていたと考えなければならないのである（この点に関する詳しい議論は、Harris (1988) 第2章を参照）。同じような状況が、ワイトゲンシュタインの場合にも当てはまる。前期のワイトゲンシュタインの言語論は、しばしば「写像理論」と呼ばれているように、典型的な名称目録的言語観であった。それが『哲学探究』に代表される後期の言語論では、徹底的に否定されるという形になっている。例えば、そういった事情を端的に語っているのが、『哲学探究』の出だしが、アウグスティヌスが子どもの時分にいかにして言葉の意味を理解したかについての記述の引用で始まっていることである。そこに描かれているアウグスティヌスの言語観は、正に典型的な名称目録的言語観であるが、それに続けてワイトゲンシュタインは、次のようなコメントを続けている。

これらの言葉には、人間言語の本質に関するある特定の姿が描かれているように思われる。つまり、言語に含まれる1つ1つの語は、ある対象を名指しする。そして文とは、そのような名前を結び合わせたものである、ということである。このような言語観のうちに、我々は次のような考えの源泉を認めることができる。つまり、どの語にも1つの意味がある。意味は語に結びついている。それは、語が表す対象である。（『哲学探究』1）

これは正に、『論理哲学論考』に述べられた彼自身の初期の言語観でもある。例えば、『論理哲学論考』によれば、「名前は対象を意味する。対象が名前の意味 (Bedeutung) である」（『論理哲学論考』3.203）となっている。このアウグスティヌスの言語観を攻撃することで、ワイトゲンシュタインが実際に批判の目を向けているのは、この自身の初期の言語観であると考えられる (Baker and Hacker (1980) など)。また、ワイトゲンシュタインのこの

『哲学探究』第1節のコメントは、ソシュールの『一般言語学講義』のなかの一章「言語記号の性質」の冒頭部分を想起させるものである。「ある人々にとって、言語とは結局、1つの名称目録にはかならない。つまり、事物のリストに対応する同数の単語のリストなのである。」(『一般言語学講義』97)このようにみえてくると、2人はともに、後期を代表する著作において、まずそれまで支配的だった名称目録的な言語観を意識的に取り上げ、それを批判し(その批判の対象には彼ら自身の初期の言語観も含まれる)、それと全く相対立するものとして新たな言語観を登場させていると言えだろう。そして両者とも、それはチェスをモデルとしたゲーム的言語観だったと理解することができるのである。

ウィトゲンシュタインも、言語の働きを説明するのにチェスの例を持ち出すことが多かったわけだが、以下のウィトゲンシュタインの主張と先に引用したソシュール『一般言語学講義』で指摘されている言語とチェスの類比とを比較してみると、この2人の言語の本性に対する洞察には、やはり本質的に同一のものがあつたとしか思えない。

我々が言語について語るのは、正にチェスの駒について語るように語るのであって、そこではゲームの規則を述べているのであって、その物理的特性を記述しているのではない。「語とは本来、何であるか」という問いは、「チェスの駒とは何であるか」という問いに似ている。(『哲学探究』108)

ゲーム的言語観というのは、要するに、言葉は外的世界から何ら根拠を与えられておらず、したがって言語というのは自律的な現象であり、言語記号はすべて恣意的である、ということになる。ソシュールは、これをもって「言語記号の第一原理」と呼んだ。ウィトゲンシュタインでもいくつかの箇所、ソシュールと同じように言語記号の恣意性という問題を取り上げている(例えば『哲学探究』第508節から第510節にかけて)。また、言語をゲームとみるとすれば、チェスの駒に相当する語だけでなく、ゲームの規則に相当する文法についても、恣意性ということが問題になる。ウィトゲンシュタ

インは、むしろこの「文法の恣意性」ということを多く議論しているように思われる。例えば、ウィトゲンシュタインは、「文法の恣意性」ということで次のように述べている。

文法は現実に対して釈明しなければならぬいわれはない。文法の諸規則がはじめて意味を規定（構成）するのであって、したがってそれらはいかなる意味に対しても責任はなく、その限りで恣意的である。

（『哲学的文法 1』256）

「言語と現実」の結合は、語の説明によってなされる。そして、その説明は文法に属している。こうして、言語はどこまでも自己完結的であり、自律的である。（『哲学的文法 1』125）

ゲームの規則がどのような意味で恣意的なのかということについて、ウィトゲンシュタインは、『『ゲーム』という概念は、ゲームが我々に対してもたらす効果によっては定義されない』（『哲学的文法 1』268）ということであると述べている。文法も同じような意味で恣意的であるということになる。ウィトゲンシュタインは、文法の規則と料理の規則とを次のように比較している。

私が料理の規則を恣意的であると言わないのは、なぜなのか。一方、文法の規則を恣意的であると言おうとするのは、なぜなのか。それは、「料理」という概念が料理の目的によって定義されるのに対して、「言語」という概念の方は言語の目的によって定義されるものではないと考えるからである。（『哲学的文法 1』257）

そして、ソシュールの以下のような記述は、これとほぼ同じような主旨のことを述べようとしたものとみることができるだろう。

他の人間の諸制度—慣習，法律など—はすべて，程度の違いはあれ，事物の自然な関係に基づいている。それらの場合には，用いられる手段と追求される目的との間に必然的な適合がある。我々の服装を決める流行ですら，完全に恣意的であるというわけではない。人体によって規制される条件からある一定の範囲を超えてははずれることはできない。しかし，言語の場合には，その手段の選択において，何の制限を受けることもない。

（『一般言語学講義』108）

3. 言語と思考の問題

名称目録的言語観からゲーム的言語観への転換は，さまざまな点においてそれまでの言語に対する考え方を大きく変えることになるわけだが，そのなかでも特に大きな影響を受けてくる問題の1つは，言語と思考の関係をめぐる問題であろう。3節では，この問題をめぐっての両者の考え方を整理してみたい。

2節の冒頭でみたソシユールの大気の水の接触の比喩が物語るように，音と思考の間の結びつきは，あらかじめ独立に存在する2つを結びつけているというものではなく，両者は同時に発生する，不可分の存在である。名称目録的言語観からゲーム的言語観への転換の場合には，必ずそういうことが意味されてくる。チェスの駒のナイトがチェスゲームの外のどんな思考を表現しているかを問うことは無意味である。同じように，例えば「犬」という語が言語外のどんな思考を表しているかを問うことは，全く意味をなさないことになると考えなければならない。「犬」という語の場合も，それが心的に「表示」している何らかの「事物」あるいは外的世界に属する事柄によっては説明することはできない。「犬」という語において，その音型と概念が同時発生的に生まれるのである。

我々は，何となく，音と思考とを別々の存在として切り離して考えようとする傾向があるわけだが，言語学的にみて完全な意味での同義語が，語彙的

にも構文的にも、存在しないという事実は、正に音・表現＝思考・内容ということを雄弁に物語っているように思われる。さらに、小浜（2007:16）などでも指摘されているように、我々は、頭の中で考えをまとめてから話すというより、「いったん話しはじめるとまるで巻物がくるくるとほどけていくように、自動的に口をついて出てくる」というのが真実であるように思われる。こういった事実を考慮にいれても、「表現それ自体が思想であって、その表現以外のところに「思想」と呼べるものを探しても無駄」（小浜（2007:16））という主張は、真実を衝いているように思えるのである。

音と思考、表現と内容とが本来一致するものであるとするならば、音・表現とは別に、思考・内容の面を敢えて考える必要はあるのだろうか。この問題をめぐっては、ソシュールとウィトゲンシュタインの言語観の間に微妙なずれが生じてくる。ウィトゲンシュタインの見解は明解であり、思考と表現は一致するのであるから、目に見えない何か不可解な心的過程としての思考は否定される。ウィトゲンシュタインは、『青色本』において、まず、言語の働きというものに対する我々の一般常識的な考え方を指摘する。

我々は、言語の働きを2つの部分からできていると考えがちである。つまり、1つは無機的な部分であり、記号を操作する部分、もう1つは有機的な部分であり、いわゆるこれらの記号を理解し、意味を与え、解釈し、思考する部分である。後者の部分のこういった働きは、精神という不可解な種類の媒体のなかで起こっているように思われる。この精神のメカニズムの性質については、我々はあまりよく理解しているようには思えないのだが、いずれにせよ、それによって、どんな物質的なメカニズムでも果たし得ない効果が生じることになるのだ。（『青色本』25）

しかしウィトゲンシュタインによれば、この言語の「有機的な」部分と「無機的な」部分との間の区分を認めようとする強い気持ちは、退けられなければならない。その理由として彼は、同書のもう少し後の方で、次のように述べている。

・・・思考を「心的な働き」とするのは、誤解を招く。思考とは、本質的に記号を操作する働きだからである。この働きは、書くことで考えている場合には、手によってなされる。また、話すことで考えている場合には、口と喉によってなされるのだ。(『青色本』30)

ウィトゲンシュタインの考えでは、思考というのは記号操作なのであり、同様のことは『哲学的文法1』でも既に述べられている。

言語というのは、我々にとって、1つの記号操作である。そしてそれは言語行動によって特徴づけられる。(『哲学的文法1』268)

以上のように、ウィトゲンシュタインの場合には、不可解な心的過程としての思考は否定されているが、ソシュールは、『一般言語学講義』では少なくとも、音と思考とを分けて記述している。ラテン語のarborという語の名称目録的言語観に基づいた説明に触れながら、「この単純素朴な見方にも、一分の真理が含まれている。それは、言語の単位というものが、2つの成分の合成からできた二面的なものであるということである。」(『一般言語学講義』97)と述べている。つまり、言語記号には二面性があるという点をソシュールは認めていることになる。これを承認することで、名称目録的言語観に対するソシュールの批判のあり方とウィトゲンシュタインの批判のあり方との違いが、はっきりと浮き彫りにされていると言える。同じ批判であっても、ウィトゲンシュタインの方がラディカルである。ソシュールは、arborという語がある一定の概念を表しているとのみ主張されている場合には一さらに、その概念が何らかの形でarborとは独立的に存在すると主張しない限りは一批判を行なうことはないからである。

ただ、もし言語とチェスゲームとの類比を徹底させようとするならば、ウィトゲンシュタインが論じているように、言語に関して目に見えない何か不可解な心的過程としての思考というものを認めるのはおかしなことになるだ

ろうと思われる。チェスゲームが意味をもつのは、プレーヤーの心のなかで起こっていることによってであると考えるのは間違っている。すべては、チェス盤の上で繰り広げられている駒の動かし方に示されているのである。チェス盤の上で繰り広げられていることを理解するためには、プレーヤーの心的活動に通じている必要はない。それと同じように、言語が意味をもつのは、それに随伴する目に見えない何らかの思考過程によってであるという考え方は誤りになるだろう。目に見える形で現れている記号操作こそが、思考そのものということになるのである。

もう1つ、ソシュールとウイトゲンシュタインの間で、微妙に違ってくるのは、前言語的な思考の存在についてである。ソシュールの場合には、前言語的な思考というものはきっぱりと否定される。「あらかじめ確立されている観念などというものはなく、言語が現われる以前には、何一つ判別できるものはない」（『一般言語学講義』157）からである。ウイトゲンシュタインの場合はもう少し慎重である。先に見たように、思考というものを一種の記号操作と捉え、「手によって」も「口と喉によって」もなされるものとするならば、当然そう考えなければならない。もちろん言語によらなければ不可能であるような構造上の複雑さを必要とする思考形式があるとは認めつつも、彼は次のように述べる。

ときどき、動物は精神的能力を欠いているがために話さない、と言われる。そして、このことが意味していることは、「動物は、考えないがために話さない」ということである。しかし、動物は単に話さない、というだけのことなのだ。あるいは、むしろこう言ったほうがいい。動物は言語というものを使わない—最も原始的な言語形態を度外視するとすれば。

（『哲学探究』25）

ここにおいて、動物にもある種の思考の可能性はあるということをウイトゲンシュタインは否定していない。そもそもウイトゲンシュタインの有名な「言語ゲーム」の考え方では、言語というのは、必ずしも非言語的な活動と

切り離すことはできないものであるし、したがって、言語のおかげで可能になっていることもまた、それ以外のことからはっきり分けることができないということになるからである。⁴⁾

以上、ソシュールとウィトゲンシュタインの言語と思考の関係をめぐる見解について、相違点と思われるものを2つみてきたことになる。

4. おわりに

本稿では、ソシュールとウィトゲンシュタインの言語思想を、特に言語と思考の問題をめぐってみてきた。両者は本質的な点で同じ言語観に立っていたと言ってよい。もちろん、両者の間には、すぐ気がつくことのできるような相違点があることも事実である。例えば、ソシュール言語学においては、ラング／パロール、言語の共時的研究／通時的研究などの区別が非常に重要な役割をもっているが、ウィトゲンシュタインの場合には、それに対応するような区別は全く存在しない。そもそも同じく言語を対象にしているといっても、ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の考え方に従えば、言語活動と非言語的な活動との間にすら、明確な区別は存在しないのである。

しかし、両者は、彼ら以前の西洋言語思想がそうだったように、もし言語を名称目録的に考え、言語的事実を明らかにするために言語の外部にあるものに目を向けようとするならば、言語とは何かという問題を完全に理解しそこなってしまうと考えていたという非常に重要な点において、完全に一致していたのである。言語とは何か、言語研究はどうあるべきかに対する考え方、そして3節でみてきたような、言語と思考の関係をめぐる考え方の微妙な違いというのは、結局のところ、言語が科学的研究の対象となり得ると信じ、そのための諸術語の明確な定義づけや理論的・方法論的基盤の構築に奮闘しなければならなかった言語学者ソシュールと、言語が科学的研究の対象となり得るとは考えず、言語の研究が「言語によって我々の知性をまどわしているもの」(『哲学探究』第109節)に対する哲学者の解決方法であると考えた

哲学者ウィトゲンシュタインとの違いであったと言えるのではないだろうか。⁵⁾ ウィトゲンシュタインにとって、哲学の仕事というのは、何よりもただ、この「言語によって我々の知性をまどわしているもの」を一掃することにあつたからである。

註

1) ただし、Harris(1988)は例外である。そこでは、ソシュールとウィトゲンシュタインの言語思想について、これまであまり指摘されることのなかった類縁性について非常に興味深い議論が展開されている。今回、本稿をまとめるにあたっては、このHarris(1988)に負うところが大きかった。なお、本稿で考察するソシュール、ウィトゲンシュタインというのは、それぞれ『一般言語学講義』に現れている後期のソシュールの言語思想、『哲学探究』に代表される後期のウィトゲンシュタインの言語思想のことである。

2) 以下、基本的にソシュールとウィトゲンシュタインの引用は、翻訳書の頁を記している。ただし、『論理哲学論考』と『哲学探究』については、節番号を記した。訳は筆者による拙訳である。

3) 実際のところ、このような言語の見方、問題設定のあり方というのは、ヨーロッパ文化に独特の言語の見方の伝統であって、普遍性をもつようなものでは決してない。少なくとも、日本の文化伝統のなかでは、言語をこのように世界の写像とするような見方は存在しなかった。むしろ、言語に対して根深い不信を抱き、言語を「妄念」の源泉と考えるということが、日本を含む東洋の哲学の1つの特徴であったと言える(井筒(1989)など)。西洋のそれまでの言語思想に対して異議申し立てを行なったソシュールの思想、特に言語において関与的なのは(実体ではなく)差異、関係性という主張などが、禅や唯識、華厳哲学をはじめとする仏教などの東洋の言語や無意識に対する考え方と類似性があるということは、よく指摘されることである(例えば、竹村(2001)などを参照)。

4) 言語ゲームというのは、ウィトゲンシュタイン自身による定義では、「言語とそれが織り込まれている活動の全体」(『哲学探究』7)と特徴づけられる。

5) ソシユールとウィトゲンシュタインが言語研究と科学との関係をどう考えていたかについては、Harris (1988) の第10章に詳しい議論がある。

参考文献

Baker, G. P. and Hacker, P. M. S. (1980) Wittgenstein: Meaning and Understanding. Oxford: Blackwell.

Harris, R. (1988) Language, Saussure and Wittgenstein. London: Routledge.

Harris, R. and Taylor, T. J. (1989) Landmarks in Linguistic Thought: The Western Tradition from Socrates to Saussure. London:

Routledge. (斎藤伸治・滝沢直宏訳『言語論のランドマーク』大修館書店)
井筒俊彦 (1989) 「事事無礙・理理無礙—存在解体のあと—」『コスモスとアンチコスモス 東洋哲学のために』1-102. 岩波書店.

小浜逸郎 (2007) 『言葉はなぜ通じないのか』PHP新書.

丸山圭三郎 (1981) 『ソシユールの思想』岩波書店.

Sapir, E. (1929) "The Status of Linguistics as a Science", Language 5.

(池上嘉彦訳「科学としての言語学の地位」(抄)『文化人類学と言語学』1-3. 弘文堂)

Saussure, F. de. (1983) Course in General Linguistics. Translated by R.

Harris. London: Duckworth. (小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店)

Sweet, H. (1900) The History of Language. London: Dent.

竹村牧男 (2001) 『唯識の構造』春秋社.

Whorf, B. L. (1940) "Science and Linguistics", Technological Review 42.

(池上嘉彦訳「科学と言語学」『言語・思考・現実』143-164. 講談社学術

文庫)

Wittgenstein, L. (1922) *Tractus Logico-Philosophicus*. Translated by C. K. Ogden and F. Ramsey. London: Routledge. (奥雅博訳『論理哲学論考』大修館書店)

Wittgenstein, L. (1953) *Philosophical Investigations*. Translated by G.E. M. Anscombe. Oxford: Blackwell. (藤本隆志訳『哲学探究』大修館書店)

Wittgenstein, L. (1958) *The Blue and Brown Books*. Oxford: Blackwell. (大森莊蔵・杖下隆英訳『青色本・茶色本』大修館書店)

Wittgenstein, L. (1974) *Philosophical Grammar*. Translated by A. Kenny. Oxford: Blackwell. (山本信訳『哲学的文法1』大修館書店)